

兵庫県、鳥取県、岡山県境にみる川下、川裾、川濯神の伝承

舟山直治・村上孝一・尾曲香織

Key Words 大祓 (Purification)、水無月神社 ("Minaduki" shrine)、分水界 (Watersheds)、祭祀 (Rituals)、分布 (Distribution)

1 はじめに

本稿は科学研究費助成事業「西廻り航路を介して北海道に伝播した大祓の祭祀と伝承をめぐる諸問題の民俗学的研究」(課題番号: 25370961) における2016年度の調査報告である。この研究の目的は、江戸時代の西廻り航路などを介した地域間交流を背景に北海道へ伝わった大祓の祭祀が、後に川下、川裾、川濯神として北海道南西部を中心に伝承されている信仰と本州の伝承事例とを比較整理して、道内における信仰形態と祭祀の変遷過程を明らかにすることにある。

本研究初年度の2013年度から、北海道内では、南西部を中心に大祓に関わる祓戸の神を祭祀する神社と、川下、川裾、川濯神の関係性を明らかにするため、神像、神徳、祭日と各社の祭りを調査してきた(舟山 2014)。その結果、北海道南西部では、旧暦6月晦日の大祓神事から分離して、冬期に地域の女性達が川下、川裾、川濯神の祭りをを行う形態が、特徴的な事例となっていることを示した(舟山 2015)。また、5ヶ年計画で積丹郡積丹町余別を中心に、川下神の祭祀について継続して調査し、3班からなる当番ごとの祭祀状況を記録してきた。

一方、北海道の祭祀状況と比較するため、川下、川裾、川濯神の祭祀が本州で最も多い兵庫県と、同県に隣接する京都府、鳥取県、岡山県の河川流域において、瀬織津姫命など祓戸の神を祭神としている神社を調査している。これまでは、1府3県の河川を日本海側と太平洋側との分水界で振り分けて、川下、川裾、川濯神の分布を河川ごとに示すとともに、大祓との関係性を調査してきた。日本海側では、西から鳥取県の千代川(本文および図1など概略図に示す河川記号se)、兵庫県の岸田川(同ki)、矢田川(同ya)、竹野川(同ht)、円山川(同ma)、京都府の久美谷川(同ku)、川上谷川(同ka)、福田川(同fu)、竹野川(同kt)、宇川(同u)、犀川(同sa)、波見川(同ha)、野田川(同no)、由良川(同y)、高野川(同

ta)の15水系の分布調査を実施した。瀬戸内海側では、西から岡山県の吉井川(同yo)、兵庫県の千種川(同ti)、揖保川(同ib)、市川(同it)、加古川(同k)、明石川(同ak)、武庫川(同mu)の7水系と兵庫県を中心に調査を実施した。川下、川裾、川濯神の分布は、先の河川記号に加えて、数字を付して神社の位置を概略図に示してきた。2015年度は、兵庫県と京都府における祭祀場所と祭礼について、特に加古川水系と由良川水系の河川流域の川下、川裾、川濯神の分布状況を示し、両河川流域における祭祀の特徴を明らかにしたところである(舟山・村上 2016)。

本年度は、川下、川裾、川濯神の本州分布域の西端にある鳥取県千代川水系流域と岡山県吉野川水系流域の当該祭祀を調査し、大祓にかかわる祭神との関係性の有無を明らかにしたいと考える。また、両県と分水界で接する兵庫県東部の祭祀状況についても補足調査を行い、県境で接する地域の河川祭祀の特徴をまとめ、伝承ルートを探るための基礎資料とするものである。

なお、兵庫県、鳥取県、岡山県境の祭祀調査に際しては、河川の合流点に祀られる神社を対象にした上で、各県の神社誌から、大祓に係わりの深い祭神である祓戸の神や水無月神社を共著者と共同で選定し、調査を進めた。

2 鳥取県東部、千代川水系の祭祀

(1) 千代川下流域

賀露神社(鳥取市賀露町北)は、『鳥取県神社誌』によれば、起源不詳で、祭日4月11日、祭神は大山祇命、猿田彦命、木花咲耶姫命、吉備真吉備、武甕槌命である(鳥取神職会編 1935: 217-219)。また、同史料によると、境内社として水戸神社と船玉神社があり、前社には瀬織津男神と瀬織津姫神が祀られている。

桜谷神社(鳥取市桜谷)は、千代川右岸の面影山南麓に鎮座している。『鳥取県神社誌』によれば、起源不詳

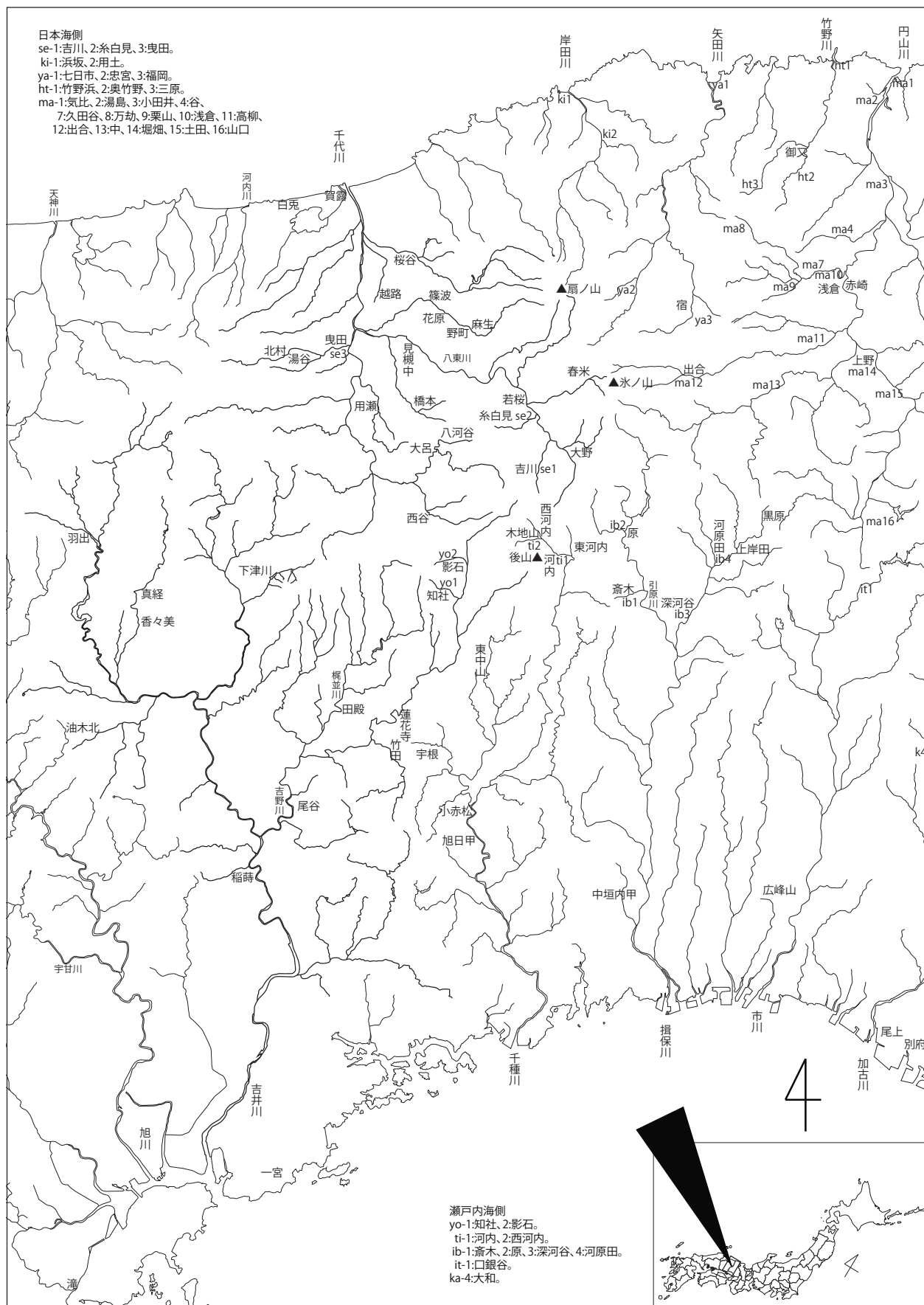


図1 兵庫県、鳥取県、岡山県境の河川にみられる川下、川裾、川濯神の所在地の概略図（地理院地図、電子国土web をもとに作成）

で、祭日は3月19日となっている（鳥取神職会編 1935：57）。また同史料によると、祭神の瀬織津姫神は、1868年（明治元）まで鎮守大明神と呼称されていた。

越路神社（鳥取市越路）は、大路川上流の八坂山南東山裾に鎮座している。『鳥取県神社誌』によれば、起源不詳で、祭日は4月9日となっている（鳥取神職会編 1935：36）。祭神は、瀬織津姫神で、1868年（明治元）までは八王子権現と呼称され、雨乞踊が伝承されている。

(2) 千代川中流域

湯谷神社（鳥取市河原町湯谷）は、曳田川北岸に鎮座している。『鳥取県神社誌』によれば、起源不詳で、祭日は10月19日である（鳥取神職会編 1935：118-119）。同史料によると、祭神は天穂日命で、1868年（明治元）に瀧神祭神の瀬織津姫命と保食神が合祀されている。

北村神社（鳥取市河原町北村）は、曳田川の山際に鎮座している。『鳥取県神社誌』によれば、起源不詳で、祭日は10月19日である（鳥取神職会編 1935：120）。祭神は天照大神と月読命で、1868年（明治元）に三瀧神の瀬織津比売命が合祀されている。

東井神社（鳥取市用瀬町用瀬）は、千代川中流左岸に鎮座している。『鳥取県神社誌』によれば、起源不詳で、祭日は4月24日である（鳥取神職会編 1935：176-177）。また、同史料によると、祭神は素盞鳴尊、猿田彦大神、瀬織津姫命、大山祇命、大国主神、事代主神、道真公の7柱であるが、瀬織津媛命と猿田彦大神の両神は、1868年（明治元）に合祀された磐瀧神の祭神である。

(3) 千代川上流域

虫井神社（八頭郡智頭町大呂）は、北股川右岸の普光山に鎮座している。『鳥取県神社誌』によれば、祭神は須佐之男神、瀬織津姫命、速秋津比咩、大山祇命、宇賀魂命、天之御中主命の6柱で、祭日が9月18日である（鳥取神職会編 1935：196-198）。同史料によると、虫井神社の起源は不詳であるが、中社に虫井神、左社に三瀧神、右社に荒海神を祀る三社が9世紀末にはみられたという。この内、左社の三瀧神の祭神が瀬織津姫命、右社の荒海神の祭神が速秋津比咩である。

白坪神社（八頭郡智頭町西谷）は、白坪川左岸に鎮座している。『鳥取県神社誌』によれば、祭神が瀬織津姫命で、祭日は10月8日である（鳥取神職会編 1935：199）。同史料によれば、1872年（明治5）に白坪神社と改称する以前は、太芸宮と呼称され、安芸の厳島神社から分霊されたと伝わる瀧牛王を祭祀していた。

(4) 千代川支流八東川流域

美幣奴神社（八頭郡八頭町篠波）は、大市谷川右岸の

丘陵地に鎮座している。『鳥取県神社誌』によると、この社は延喜式内社で、祭神が太玉命、祭日が4月9日となっている（鳥取神職会編 1935：169-170）。同史料によると、1868年（明治元）に保食神とともに、瀧神の祭神であった瀬織津姫神が合祀された。現在では祭日は、4月9日に近い日曜日を選び、祭礼には湯釜の神事が行われるという。

花原神社（八頭郡八頭町花原）は、花原川沿いの小山に鎮座している。神社の由来書きによると、創立年不詳で、1394年～1428年（応永年間）の祭祀と伝わる素戔鳴尊が祭神で、1868年（明治元）に瀬織津姫命と応神天皇を合祀し、花原神社に改めたという（八頭町教育委員会 1997）。『鳥取県神社誌』によると、祭日は4月8日である（鳥取神職会編 1935：170）。素戔鳴尊の祭祀について、『郡家町誌』によれば、「毎年六月十八日村中参籠し、神職を招請して御札を受けて田畑に立てた」（郡家町誌編集委員会編 1969：344）とあり、夏期に虫除神事があったことが理解できる。

野町神社（八頭郡八頭町野町）は、私都川左岸に鎮座している。『鳥取県神社誌』によると、創立年不詳で、祭日は10月16日である（鳥取神職会編 1935：166）。同史料によると、祭神は彦火瓊瓊杵命で、1968年（明治元）に摂社祭神の瀬織津姫命が合祀されている。

麻生神社（八頭郡八頭町麻生）は、私都川左岸に鎮座している。『鳥取県神社誌』によると、創立年不詳で、祭日は4月3日である（鳥取神職会編 1935：165）。同史料によれば、祭神は経津主命で、1868年（明治元）に瀬織津姫命が、倉稻魂命、大山祇命とともに合祀された。

大江神社（八頭郡八頭町橋本）は、大江川中流左岸に鎮座している。この神社の由来書きによると、創立年不詳であるが、天穂日命、大己貴命、三穗津姫命の3柱を祀る延喜式内社とされ、祭日は4月29日となっている（八頭町教育委員会 2009）。『鳥取県神社誌』によれば、同社の境内末社の中には、瀬織津姫命、速開津姫命、速佐須良比咩命、気吹戸主命といった祓戸の神の4柱のほか、木花開耶姫命や湍津姫命もみられる（鳥取神職会編 1935：97-99）。

隼神社（八頭郡八頭町見槻中）は、八東川左岸に鎮座している。『鳥取県神社誌』によれば、祭神は須佐之雄神など28柱で、祭日が4月25日である（鳥取神職会編 1935：127-128）。祭神には瀬織津媛命、速秋津媛命、気吹戸主命といった祓戸の神が合祀されている。

春米神社（八頭郡八頭町春米）は、八東川支流春米川最上流左岸に鎮座している。『鳥取県神社誌』によると、創立年不詳、祭日が5月10日、祭神は天御中主神で五穀豊穡と安産守護に霊験があるとされている（鳥取神職会

編 1935:158)。同史料によれば、1868年（明治元）には伊香色雄命、倉稲魂命、大山祇命とともに、瀬織津姫命（瀧ノ神）を合祀している。

(5) 千代川水系の川下、川裾、川濯神

糸白見神社（八頭郡八頭町糸白見、写真1）は、糸白見川と八東川の合流部に鎮座している。『鳥取県神社誌』によると、1744年（延享元）と伝えられ、祭神が武甕槌神、祭日は10月19日である（鳥取神職会編 1935:155）。本殿は5社を祀るもので、中央が産土大神、右に秋葉大神、右端が連名で火乃神様と山乃神様、左に八幡大神、左端が川下大神（写真2、図1-se2）と6柱の表記がある。川下大神について、若桜神社宮司の春菜和俊氏によれば、「カワスソ」と呼称し、6月から7月頃に川下神の祭壇を作って祭祀するという。境内には、川から水を引いた水場があり（写真3）、祓の際に人形を清めるという。

吉川神社（八頭郡八頭町吉川、写真4）は、八東川左岸に鎮座している。『鳥取県神社誌』によると、創立1700年（元禄13）、祭神が天御中主神で、祭日は5月9日である（鳥取神職会編 1935:160）。若桜神社宮司の春菜和俊氏によれば、7月末には「カワスソ」の祭りが行われ、参拝者は御釜神事で使用した笹を持ち帰り、川へ流しているという。同様の習俗は、「川裾雑記」に、「若桜町吉川では、湯立が中心になっている感があり」（池田 1959:18）と記載があり、少なくとも50年を超えて伝承されていることになる。しかし、この湯立神事は、若桜町の各社でも春祭りで行っており、夏期の川下祭りだけにかかわりのある神事とはいえない。吉川地区在住の中本俱子氏によれば、祭神が女性の神様とも呼ばれることから、7月28日の川下祭には、吉川地区では桃を用意して、参拝者へ配っている。御釜で持ち帰った笹は、自家の畑に挿して虫除けなどにする。祭日には、吉川川と江浪谷川の合流部に（写真5・6、図1-se1）、40cmから50cm四方の祭壇を設けて祭祀を行うという。

(6) 千代川水系における祭祀の特徴

千代川流域における夏越大祓に関わりの深い水無月神社、祓戸の神、川下、川裾、川濯神の祭祀について、『鳥取県神社誌』をもとに調査した結果を整理する。

千代川流域では、水無月神社を確認することができなかった。しかしながら、八頭町の橋本地区の大江神社境内末社に瀬織津姫命、速開津姫命、速佐須良比咩命、気吹戸主命の4柱、見槻中地区の隼神社に瀬織津媛命、速秋津媛命、気吹戸主命の3柱、加えて虫井神社には瀬織津姫命と速秋津比咩が祀られていた。

また、鳥取市には、賀露町の賀露神社境内社の水戸神社、桜谷地区の桜谷神社、越路地区の越路神社、河原町

湯谷地区の湯谷神社合祀神、河原町北村地区の北村神社合祀の三瀧瀧神、用瀬町用瀬地区の東井神社合祀の磐瀧神として、計6社に瀬織津姫神が祀られている。同じく八頭郡智頭町には、大呂地区に虫井神社の三瀧神、西谷地区に白坪神社の2社に瀬織津姫神が祀られていた。

さらに、千代川支流の八東川流域にある八頭郡八頭町には、篠波地区の美幣奴神社合祀の瀧神、花原地区の花原神社合祀神、野町地区の野町神社摂社祭神、麻生地区の麻生神社合祀神、春米地区の春米神社合祀神として瀬織津姫命が祀られていた。

千代川流域の祓戸の神を祀る神社の例祭日は、3月から5月の間と、10月から11月の間にあり、春秋の2季に集中している。祓戸の神の祭祀をみても、篠波地区、湯谷地区、用瀬地区、大呂地区のように、瀬織津姫命は滝神として祀られることが多く、越路地区では雨乞い、花原地区では6月18日の虫除などの神事がみられた。しかし、今回の調査では、夏越大祓など旧暦6月晦日に直結する祭祀を確認することができなかった。

一方、千代川支流の八東川上流の八頭郡若桜町の糸白見と吉川の両地区では、神社祭神に祓戸の神はみられないが、川下神を祀り、7月末に祭祀を行っている。この神は、両地区とも「川下」と表記し、「カワスソ」と呼称されている神様で、川の合流点で祭祀を行っている。

また、千代川支流の曳田川左岸の売沼神社（鳥取市河原町曳田）は、『鳥取県神社誌』によれば、祭神が八上比売神で、祭日が10月15日とあるように（鳥取神職会編 1935:113-114）、祭神と祭祀からは川下神との関わりはみられない。しかし、7月末には「川下大明神」という幟を建て、茅輪くぐりなどの祭祀が行われている。さらに、『鳥取県神社誌』によると、千代川河口から西へ外れる白兎海岸に川下神社がみられる。この神社は、1912年（大正元）に白兎神社へ合祀されたもので、祭神が豊玉姫命、祭日が7月末である（鳥取神職会編 1935:213-214）。

3 岡山県東部、吉井川水系の祭祀

(1) 吉井川下流域

瀧神社（岡山市東区西大寺一宮）は、『岡山県神社誌』によると、祭神は瀬織津姫命、大己貴命、素戔鳴尊の3柱で、祭日が10月10日である（岡山県神社庁編 1981:195）。同史料によると、創建年が不詳で、社名は丸山川の瀧津瀬から起こったと伝えられている。

(2) 吉井川中流域

高星神社（岡山県赤磐市稲蒔）は、吉井川右岸に鎮座している。『岡山県神社誌』によると、祭神は高星神、

阿遅鉏高日子根命、瀬織津比売命で、祭日が10月17日である。創建年は不詳である（岡山県神社庁編 1981：156）。

(3) 吉井川上流域

大美禰神社（苫田郡鏡野町香々美）は、香々美川岸に鎮座している。『岡山県神社誌』によると、祭神は大宮能売命など15柱で、祭日が10月15日である（岡山県神社庁編 1981：54）。瀬織津姫命は、15柱に含まれている。

香々美神社（苫田郡鏡野町真経）は、香々美川岸に鎮座している。『岡山県神社誌』によると、祭神は大国主神など12柱で、祭日が10月20日である（岡山県神社庁編 1981：56）。瀬織津姫命は、12柱に含まれている。

下津川神社（苫田郡加茂町下津川）は、奥津川と加茂川の合流部に鎮座している。『岡山県神社誌』によると、祭神が素戔鳴尊など5柱で、祭日は10月14日である（岡山県神社庁編 1981：65）。同史料によると、創建年月は不詳で、1915年（大正4）に滝神社祭神の瀬織津姫命を合祀している。

(4) 吉井川支流吉野川流域

瀧神社（美作市尾谷）は、『岡山県神社誌』によると、祭神は瀬織津比売命で、祭日が10月17日となっている（岡山県神社庁編 1981：468）。同史料によると、創建年は712年（和銅5）と伝えられている。

竹田神社（美作市竹田）は、『岡山県神社誌』によると、祭神が誉田別尊で合祀神として瀬織津姫命が祀られている（岡山県神社庁編 1981：468）。同史料によると、創建は807年（大同2）、祭日が10月16日である。

大瀧神社（美作市蓮花寺）は、『岡山県神社誌』によると、祭神は瀬織津姫命で、祭日が10月20日である（岡山県神社庁編 1981：464）。同史料によると、創建年は1573年から1592（天正年間）と伝えられており、摂末社に速瀧神社が祀られている。

田殿神社（美作市田殿）は、『岡山県神社誌』によると、祭神は瀬織津姫命ほか7柱で、祭日が10月15日である（岡山県神社庁編 1981：467-468）。同史料によると、「本神社は美作風土記神名抄に、英多郡広井郷清滝社と見えている古社」とあり、清滝社として祀られていた。

(5) 吉井川水系の川下、川裾、川濯神

川袖神（英田郡西栗倉村知社、写真7、図1-yo1）は、小松英夫氏によると、かつては吉野川に東から西へ流入する知社川の右岸で（写真8）、「川袖（カワソ）さん」の祭りが行われていたという。現在ではカワソの祭礼は行われなくなり、7月に草刈りをする程度となっている。

影石神社（英田郡西栗倉村影石、写真9）は、『岡山県神社誌』によると、祭神は大己貴命と須勢理姫大神で、祭日が10月10日である（岡山県神社庁編 1981：479）。この神社の摂末社に川裾神社が祀られている（写真10、図1-yo2）。この川裾神社は、「カワソソ祭考」によると、「天保2年卯2月願主おりん」（西岡 1977：327）とあり、祠内の神像の裏面に奉納銘が記された立像の神体があることから、1831年（天保2）には、この地域で祭祀が行われていたといえる。さらに、この祭祀の性格は、「塩谷では、カワソソ祭をするのは川のスソを浄めるため」（西岡 1977：330）とあるように、吉野川に流入する塩谷川と被い神事との関わりがあったといえる。

(6) 吉井川流域の祭祀の特徴

ここでは、吉井川流域における水無月神社、祓戸の神、川下、川裾、川濯神の祭祀について、現地調査した滝神社、田殿神社と、『岡山県神社誌』で確認した神社をもとに整理する。

吉井川流域では、水無月神社および瀬織津姫命、速開津姫命、速佐須良比咩命、気吹戸主命といった祓戸の神すべてを祀る神社を確認できなかった。

瀬織津姫命を祭祀する神社は、岡山市では一宮地区の瀧神社祭神、赤磐市では稲蔭地区の高星神社合祀神、苫田郡鏡野町では香々美地区の大美禰神社合祀神と真経地区の香々美神社合祀の滝神社祭神、苫田郡加茂町では下津川地区の下津川神社合祀の滝神社祭神の計5社にみられる。また、吉井川支流の吉野川流域において、美作市には尾谷地区の瀧神社祭神、竹田地区の竹田神社合祀神、蓮花寺地区の大瀧神社祭神、田殿地区の田殿神社祭神として、それぞれ瀬織津姫命が祀られている。

これらの神社の例祭日はいずれも10月で、夏越大祓など旧暦6月晦日にかかわる祭祀はみられない。瀬織津姫命は、一宮地区、真経地区、下津川地区、知社地区のように滝神として祭祀されているものが多い。

一方、吉井川流域の川下、川裾、川濯神は、知社川が吉野川に合流する知社地区に川袖社、塩谷川が吉野川に合流する影石地区に鎮座する影石神社の合祀社として川下大神が祀られていた。

4 兵庫県西南部、千種川水系と揖保川水系の祭祀

(1) 千種川水系の祭祀

滝神社（赤穂郡上郡町旭日甲、図1-千種川中流域）は、祭神が瀬織津姫命、祭日は10月第3日曜日である。

素戔鳴尊神社（佐用郡佐用町小赤松、図1-千種川中流域）は、産霊神社、瀬織津姫命を合祀している。祭日

表1 千代川水系、吉井川水系、千種川水系、揖保川水系の川下、川裾、川濯神

No.	図1番号	名称	祭神	所在	包括社など
1	se1	川下祭り	カワスソ	鳥取県八頭郡八頭町吉川	吉川神社
2	se2	川下祭り	川下(カワスソ)大神	鳥取県八頭郡八頭町糸白見	糸白見神社
3	se3	川下神社	川下(かわすそ)さん	鳥取県鳥取市河原町曳田	売沼神社
4	yo1	川袖さん	川袖(カワソ)神	岡山県英田郡西粟倉村知社	川曾神社
5	yo2	川下神社	川下(カワソソ)大神	岡山県英田郡西粟倉村影石	影石神社
6	ti1	川そそ祭り	川ソソ	兵庫県宍粟市千種町河内	
7	ti2	未確認	川下徳神	兵庫県宍粟市千種町西河内	(池田 1959: 17)
8	ib1	川裾祭り	カワソソ神(日天菩薩、月天菩薩)	兵庫県宍粟市波賀町斎木	高野山真言宗安養寺
9	ib2	川裾祭り	川裾(カワソソ)神	兵庫県宍粟市波賀町原	八幡神社
10	ib3	河曾々祭り	河曾々(カワソソ)神	兵庫県宍粟市一宮町深河谷	
11	ib4	川禊神社	川禊(カワソソ)神	兵庫県宍粟市一宮町河原田	八幡神社

は10月体育の日である。

清地神社(佐用郡佐用町宇根、図1-千種川中流域)は、滝神として瀬織津姫命を祀る。周辺地域に人家はなく、祭りも途絶えている。

瑞籬神社(佐用郡佐用町東中山、図1-千種川支流の佐用川流域)は、祭神が瀬織津姫命である。祭日は10月初めの日曜日である。

川そそ祭り(宍粟市千種町河内、写真11、図1-ti1)は、西から東に流れる千種川と北から南に流れる河内川合流点近くで祭祀される(写真12)。この祭祀は、「川裾雑記」によると、「河内の如きは、神主の奉幣を日没の瞬間と厳しく守っている」(池田 1959: 18)ことや、「河内で神主をはじめ村役が、直会のあと午前一時、二時までも社務所に詰めているのと共に、忌籠り」(池田 1959: 18)と、祭祀についての記載がある。

川下徳神(宍粟市千種町西河内、図1-ti2)は、「川裾雑記」に、「西河内でも木地山ドイに於てのみ、初成の胡瓜に『家内安全、川下徳神、氏名』と書いて流す例はある」(池田 1959: 17)と、川下徳神の祭祀についての記載がある。しかし、今回の調査では西河内川下流にある河内地区の祭場(図1-ti1)以外に確認することはできなかった。

宍粟市千種町の由来について、「川裾雑記」には、「川裾様は夫婦神であり、年に一度だけ此の河原で逢われる。ある時女神はススキの葉で大事なところを傷つけ、それがもとで悪い病を得、夫婦の交りをされなくなった。だから女神の涙は雨となり、たとえ三粒にもせよ必ず降る。降らぬ年には病の子が生まれるといい、己が苦しみを他に繰り返させぬため、下の病を癒すと誓われたものだともいう」(池田 1959: 18)、とあるように、字名がなく河内か西河内の区別はつけられない。しかし、川裾様は夫婦神で、女神が被った被害や下の病を治す神として信仰されていたといえる。

千種川水系の調査では、水無月神社や祓戸の神をすべて祀る神社は確認できなかった。瀬織津姫命を祀る神社は、赤穂郡上郡町には旭日甲地区の滝神社祭神、佐用郡

佐用町には小赤松地区の素戔鳴尊神社合祀神、宇根地区の清地神社祭神、東中山地区の瑞籬神社祭神として祀られている。例祭日は、いずれも10月であり、夏越大祓など旧暦6月晦日にかかわる祭祀はみられなかった。また、旭日甲、宇根地区では、瀧神を祀っている。

川下神は、宍粟市千種町河内の祭場に祭壇の台を確認できたが、西河内の祭場と祭祀の内容は未確認である。

(2) 揖保川水系の祭祀

井関三神社(たつの市揖西町中垣内甲、図1-揖保川下流域)は、天照国照彦火明櫛玉饒速日命、瀬織津姫命、建御名方命を祀っている。祭日は10月10日である。

日野神社(宍粟市一宮町上岸田、図1-揖保川上流)には、末社の合祀神として瀬織津姫命が祀られている。

若一神社(宍粟市一宮町黒原、図1-揖保川上流)には、末社清所の祭神として瀬織津姫命が祀られている。

川裾神(宍粟市波賀町斎木、図1-ib1)は、高野山真言宗安養寺で祀られている日天菩薩と月天菩薩を祭神とする。祭日は7月30日である。祭場は、東西を流れる斎木川と南北を流れる千保川の合流点付近で(写真13)、仮設の堂を建てて祭祀する。仮設の堂内には日天菩薩と月天菩薩の掛軸をかけ、その前に青銅製の鏡を前に置く。この神は、女性の神様ともいわれているが、現在の祭りでは男女関係なく参拝する。

川裾神(宍粟市波賀町原、図1-ib2)の祭場は、東西を流れる八丈川と南北を流れる引原川の合流点付近(写真14)である。祭日は7月30日で、祭場に仮設の堂を建てる。原地区の祭祀について「カワスソ祭考」に、「カワスソマツリ」といって七月三十日に若者組によって行なわれる。合流した川の三角州で三十日夕方から十二時ころまで行なわれる。三角州に堂を建て、村の氏神様の八幡神社の末社からカワスソサマの御神体である神鏡を持ち出して堂に安置する。餅一重ね、御神酒、鯛などを供える。遠方からの女の参拝者が多い」(西岡 1977: 321)とあるように、かつては若者組により八幡神社から神体を川原の祭場に遷して祭祀していた。

河曾々神（宍粟市一宮町深河谷、図1-ib3）の祭場は、揖保川に流入する深河谷川沿いの消防番屋付近である。旧来は、揖保川近くの下流の河川敷で祭祀していた（写真15）。祭祀について、「川裾雑記」によれば、「以前女兒が技芸の上達を祈ったということなども、七夕の伝承とよく似ている」（池田 1959：18）とし、カワソソ神を七夕祭りと重ねてもいる。

川禊神（宍粟市一宮町河原田、図1-ib4）の祭場は、高野川と阿舎利川の合流点付近（写真16）である。この地区では、祭りの事前準備として、6月10日から7月10日頃まで演芸会の出演者を募っている。また、「川裾雑記」によると、「川の合流点の岸辺に祭場を建て、はだしで参拝し足を洗って帰る。産土神は八幡神社」（池田 1959：18）と、かつては河川敷で足を洗う行事があった。さらに、同史料には、「行灯祭の灯、川裾神は喧嘩賭蛭・相撲など荒々しい行為を好むなどという伝承とともにあきらかである。此の地域の著名な天王社は広峰であるが」（池田 1959：18）として、姫路市の広峰神社や木山神社の祭祀と関連づけている。

瀬織津姫命を祀る神社は、揖保川水系では、たつの市の中垣内甲地区の井関三神社祭神、宍粟市では上岸田地区の日野神社合祀神、黒原地区の若一神社末社祭神として祀られていたことを確認できた。例祭日は、いずれも10月であり、夏越大祓など旧暦6月晦日にかかわる祭祀はみられなかった。また祭神についても同様で、瀬織津姫命と川下、川裾、川濯神との関連もみられなかった。

一方、川下神について、宍粟市では、斎木地区、原地区、河原田地区、深河谷地区の4ヶ所を確認した。

5 まとめにかえて

本稿では、これまで川下、川裾、川濯神の本州分布域の西端にある鳥取県千代川流域と岡山県吉野川水系流域に加え、兵庫県南西部の千種川と揖保川流域における調査を報告してきた。ここでは、大祓にかかわる祭神と川下、川裾、川濯神との関係性を明らかにするため、それぞれの神社祭祀の分布を示し、祭神と祭日について記載してきた。最後に、県境で接する地域における河川に祭祀状況を比較し、それぞれの特徴についてまとめたい。

兵庫県の揖保川は、上流域で鳥取県の千代川の支流の八東川と接している。両河川流域には、瀬織津姫命と川下、川裾、川濯神が祭祀されていた。瀬織津姫命は滝神として祀られることが多く、大祓に直接かわる祭祀を確認することができなかった。また同祭神からは、川下、川裾、川濯神との関連性をみいだせなかった。

兵庫県の千種川は、中流域で岡山県の吉井川支流の八塔寺川、上流域で吉井川支流の吉野川と接している。両河川ともに、揖保川と千代川と同様に、瀬織津姫命と川下、川裾、川濯神は祭祀されていたが、それぞれの関係性は確認できなかった。

兵庫県、鳥取県、岡山県境の4河川流域にみられる川下、川裾、川濯神は、いずれも中上流域に祀られ、夏越大祓の祭祀に関係している。一方、瀬織津姫命は、河川流域の神社に広く祀られているが、大祓の祭祀に関するのではなく、瀧神としての要素が強いといえる。

このように本調査では、北海道への伝承につながる祭祀は確認できなかった。今後は、対象地域を福井県と石川県にも広げ、夏越大祓と関係する川下、川裾、川濯神の分布と北海道への伝承ルートを探りたいと考える。

謝辞

この調査を進めるにあたり、次の方々から神社の祭祀などの聞き取りや資料の提供などで数多くのご教示をいただきました。記して厚く感謝申し上げます。

安養寺、若桜神社、井上睦照氏、川戸和雄氏、小松秀夫氏、春菜和俊氏、長田八郎氏、中本俱子氏。

また、図1を作成するにあたっては、伏見恵弥氏に大変お世話になりました。重ねて感謝いたします。

参考文献

- 池田和生 1959. 川裾雑記. 西郊民俗 9: 16-19. 西郊民俗談話会.
- 岡山県神社庁編 1981. 岡山県神社誌. 岡山県神社庁.
- 郡家町誌編集委員会編 1969. 郡家町誌. 郡家町教育委員会.
- 篠田統 1979. 川裾祭. 風俗古今東西 民衆生活ノート. pp. 193-202. 社会思想社.
- 鳥取県神職会編 1935. 鳥取県神社誌. 鳥取県神職会.
- 西岡陽子 1977. カワソソ祭考. 地域と文化: 本位田重美先生定年論文集. pp. 321-346.
- 舟山直治 1988. カワシモサマ信仰(1). 北海道開拓記念館調査報告 27: 21-30.
- 舟山直治 1992. カワシモサマ信仰(2). 北海道開拓記念館調査報告 31: 101-118.
- 舟山直治 1993. カワシモ信仰—北海道への伝播. 北海道開拓記念館研究年報 21: 35-52.
- 舟山直治 1994. 北海道西南部における明神講. 北海道開拓記念館研究年報 22: 65-88.
- 舟山直治 2014. 積丹町余別における川下祭の伝承と兵庫県の祭祀状況. 北海道地域文化研究 6: 127-146.
- 舟山直治 2015. 北海道における大祓にかかわる祭神の特徴. 北海道開拓記念館研究紀要 43: 7-20.
- 舟山直治・村上孝一 2016. 加古川水系と由良川水系の川下、川裾、川濯信仰の伝承. 北海道博物館研究紀要 1: 73-86.
- 八頭町教育委員会 1997. 花原神社. 八頭町教育委員会.
- 八頭町教育委員会 2009. 大江神社. 八頭町教育委員会誌 地誌編. 郡家町教育委員会.



写真1 糸白見神社（鳥取県八頭郡八頭町糸白見）

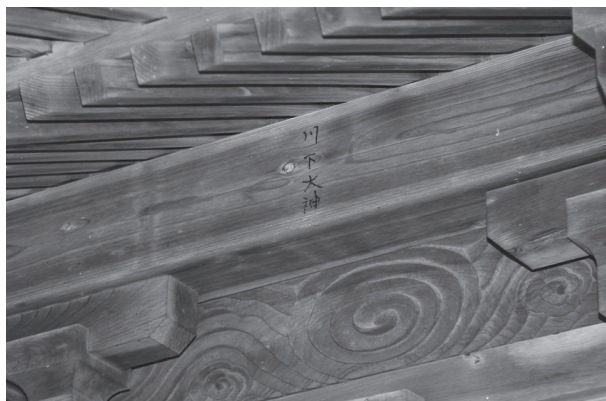


写真2 糸白見神社合祀川下（カワスソ）大神（図1-se2）



写真3 糸白見神社本殿横の水場



写真4 吉川神社（鳥取県八頭郡八頭町吉川）



写真5 吉川地区川下祭り（カワスソ）の祭場（図1-se1）

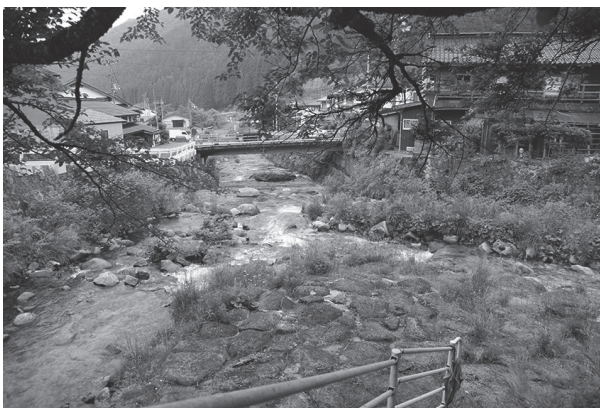


写真6 吉川地区祭場、江浪谷川と吉川川の合流部



写真7 川袖神（岡山県英田郡西栗倉村知社、図1-yo1）



写真8 知社川右岸にある川袖神の祭場（左側）



写真9 影石神社（岡山県英田郡西粟倉村影石）



写真10 影石神社摂末社、川裾神社（右側、図1-yo2）



写真11 川そそ祭りの祭場（佐用郡千種町河内、図1-ti1）



写真12 千種川と河内川の合流点近く（右側、図1-ti1）



写真13 川裾神の祭場（宍粟市波賀町斎木、図1-ib1）



写真14 川裾神の祭場（宍粟市波賀町原、図1-ib2）



写真15 河曾々神の旧祭場（宍粟市一宮町深河谷、図1-ib3）



写真16 川裾神の祭場（宍粟市一宮町河原田、図1-ib4）

Folklore of “Kawa-shimo”, “Kawa-suso” and “Kawa-so” Beliefs in the Border Area of Hyogo Prefecture, Tottori Prefecture and Okayama Prefecture

Naoji FUNAYAMA, Kouichi MURAKAMI, and Kaori OMAGARI

This article reports on investigations carried out in 2016 under a JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research, and is entitled “Folklore Research of Various Topics Regarding Transmission of “Oharae” (purification) Ritual Traditions to Hokkaido Through the western shipping route” (Research Project Number 25370961).

This fiscal year’s research conducted a distribution study on the rituals of “Kawa-shimo”, “Kawa-suso”, and “Kawa-so” religious beliefs covering Hyogo Prefecture, Tottori Prefecture neighboring

Hyogo Prefecture, and the river basin area of Eastern Okayama Prefecture. The purpose of this research is to compare the rituals and transmission format in the basins of rivers flowing into the Japan Sea and Seto Inland Sea through watersheds based on a distribution study of Hyogo Prefecture, where studies have been underway since fiscal 2013. This research elucidated that the “Kawa-shimo”, “Kawa-suso” and “Kawa-so” religious beliefs have been transmitted in the middle to upper river basins in either case.

Naoji FUNAYAMA : Director, Curatorial Division, Hokkaido Museum
Kouichi MURAKAMI : Museum Studies Group, Research Division, Hokkaido Museum
Kaori OMAGARI : Folk Life and Industrial Group, Research Division, Hokkaido Museum
